# 福島県の歴史シリーズ

## 第12回　福島県の人物（7）

# 石井研堂と雑誌『実業少年』
## ー働く少年へのまなざしー

佐藤 洋一（さとう　よういち）
福島県立博物館
専門学芸員

### 1．郡山出身の石井研堂

石井研堂（本名は民司、研堂は号）は、慶応元年（1865）６月に二本松藩領安積郡郡山町（現在の郡山市）の旅籠屋で誕生しました。漢方医大槻友仙の寺子屋に学び、開校したばかりの郡山小学校（現在の郡山市立金透小学校）で生徒として学び、また、教員として教鞭をとりました。明治18年（1885）６月に20歳で上京し、一旦帰郷して再度上京し、明治21年に小学校の教員をやりながら、雑誌『小国民』の創刊に関与して、その後、教員をやめて雑誌編集に専念しました。

研堂には多彩な業績があり、一概に紹介できませんが、不朽の名作とも言うべきは、大著『明治事物起原』（増補改訂版、上・下２巻、昭和19年）です。昭和18年12月死の直前まで校正をしていました。福島県との関わりでは、『安積艮斎詳伝』・『艮斎補伝手簡精華』・『安積艮斎略伝』（大正５年）という安積艮斎の伝記３部作は、特に多くの人びとの艮斎の再評価に影響を与えました。

喜寿の石井研堂（濱田昭二氏蔵）

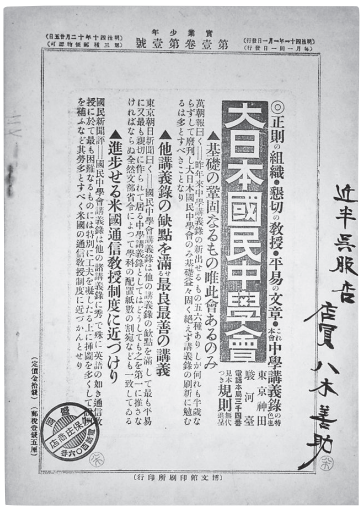
### 2．石井研堂編集の少年向け雑誌

『小（少）国民』（学齢館）は、少年向け雑誌のベストセラーになっています。その後、研堂は雑誌編集の腕を見込まれて、『今世少年』（春陽堂、明治33年創刊）、国木田独歩にこわれて『少女智識画報』（近事画報社、明治38年創刊）、『世界之少年』（有楽社、明治39年創刊）などの主筆を務めました。今回、取り上げるのは研堂の最後の雑誌編集になる『実業少年』（博文館、明治41年創刊、月刊誌）です。

### 3．『実業少年』の創刊

創刊号（第１巻第１号）を見てみましょう。B５判で写真図版４頁、本文72頁。正月号ですから多色刷りの「実業少年出世双六」が付録でした。

『実業少年』（創刊号、明治41年１月）表紙




『実業少年』（創刊号、明治41年１月）裏表紙

『実業少年』（第４巻第１号、明治43年１月）表紙

また、創刊号の第１頁には、次のような創刊の辞が掲げてあります。

「『実業少年』生る。ここに一百人の国民有りとせん。内一二人は、百点を与ふべき国家必要の人傑なりとするも、残る九十余人、皆零点なる時は、平均点僅かに一二点に止るべし。若し之に反して、たとひ百点を与ふべき人傑無しとするも、九十余人のもの、皆五六十点以上の人物のみなる時は、其の平均点の優等なるは、算盤を執りて後知ざるなり。況んや、百点の少数人物をも得たらんには、其の平均点は、益々上昇すべし。これ本誌『実業少年』の必要を生じたる所以なり。

わが国民中、最大多数を占め、国家の基礎を成す実業界の少年諸君、吾人は、一人の大詩人、一人の大政論家の出でんよりは、百人の職工諸君、商店員諸君、其他の産業に従事する諸君の、健全なる発達に由て、全国民の平均点を上昇せしめんことを希はざるを得ざるなり。諸君は、実に、国家の隆否盛衰を左右すべき大責任者なり、各、勤勉、独立、忠実、正直、倹素、公共等の諸徳を養ひ、其の天職を全ふせんことを望まざるは無からん。吾人微力といへども、敢て諸君の師友となりて、事にここに従はんとす『実業少年』の責任亦実に浅少ならざるなり。」

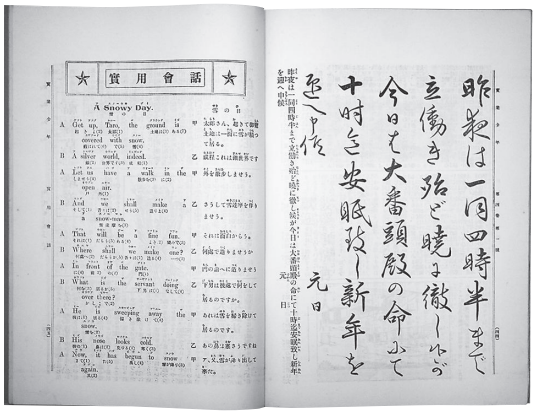
すなわち、同誌の目的は、１ないし２パーセントのエリートが対象ではなくて、国民の大多数を占める「国家の基礎を成す実業界の少年諸君」の平均点を上昇させ、「勤勉、独立、忠実、正直、倹素、公共等の諸徳」を養うことが必要であると言っています。各人が、その地位や立場にあって、精神的に向上すると同時に実学的な教養を深化させることの必要性を説いています。このような理念で、雑誌『実業少年』は誕生しました。

## ４．『実業少年』の特色

「博文館発行六大児童雑誌」（明治44年１月）という広告文には、充実していた時期の『実業少年』の刊行意図が示されています。

「将来実業界に雄飛しやうとする少年諸君は、是非此の雑誌を読んで、一般実業上の智識を進め、成功せる先輩の意見を傾聴しなければなりません、実業少年は日進月歩の商工業事情や、内外の大工場大会社等の有様を詳記し、また実業実際の相談にも応じて、親切に回答を与へますから、実業に志す少年に取りては、無二の伴侶と云ふべき物であります。」

このような刊行目的を有した雑誌はどのような内容だったのでしょうか。


昨夜は一同四時半まで立働き殆ど曉まで徹しいら今日も大番頭殿の命ふて十時迄安眠致し新年を迎へ申候

☆ 實 用 會 話 ☆

A snowy Day.

A. Get up, Tino, the ground is covered with snow.
B. A silver world, indeed.
A. Let us have a walk in the open air.
B. And we shall make a snow-man.
A. Tino will be a fine fire.
B. Where shall we make one?
A. In front of the gate.
B. What is the servant doing over there?
A. He is sweeping away the snow.
B. He looks cold.
A. Now, it has begun to snow again.

『実業少年』（第４巻第１号、明治43年１月）の記事

同誌の紙面構成について、創刊号を例にとって見てみましょう。まず、渋沢栄一・大谷嘉兵衛・手島精一らの人生訓や成功実話が載り、石井研堂執筆の日比谷平左右衛門の実歴談などがあり、また15歳の時から７年間西洋小間物店に奉公した某氏「堕落者の懺悔」が載っています。巌谷小波のベルリンの小売店紹介や金子紫草のアメリカの富豪の小伝、実業家や商業学校長などの実業界の最新の動向紹介などがあり、三越呉服店の重役だった研堂の実弟濱田四郎も書いています。その他、実務的な知識読み物としては、小切手、英語の手紙や商用会話の独習、工業技術理論、商店員の罹りやすい病気と予防法などがあります。また、補修夜学校案内のコーナーでは２校ほど紹介しています。読者のコーナーでは実業俳句や川柳、考物などの娯楽がありました。

これらには、精神的な向上、実務的な教養の深化、実力養成のための独学に資するわかりやすい教示、病気の予防法の伝授など働く少年への研堂の温かいまなざしがありました。

## ５．『実業少年』の廃刊

菅忠道は、『日本の児童文学（増補改訂版）』（大月書店、昭和41年）で、「これまでの多くの少年雑誌が国民上層の師弟をねらって来たのに、明治末年、実業教育の発達に応じて、「実業少年」のような特殊な雑誌が現れたのも注目されることである」と述べていますが、この特殊とも言われる石井研堂の高い志によって創刊された『実業少年』は、約５年の後に廃刊になります。

坪谷善四郎は、博文館の歴史に触れた『大橋左平翁伝』（昭和７年）の中で、「『実業少年』は石井民司（研堂）を主任とし、河岡英男（嘲風）之を助けたるも、予期の成績を収ることが出来なかった。」と述べていますが、「予期の成績」が直接的に出版部数、すなわち、売り上げを意味するとすれば、その内容は、主たる読者の対象である「職工諸君、商店員諸君、其他の産業に従事する諸君」は、博文館や編集者である研堂が意図したような購読者層を形成しなかったと考えられます。すなわち、購読者と想定された少年は、中学生や受験生を対象読者として特化した『中学世界』などの雑誌の購読者層とは明らかに異なり、『実業世界』の価値やおもしろさは十分に認識していても、雑誌購読という営為を自由に成し得ない少年たちであったからであると考えられます。

坪谷善四郎の『博文館五十年史』（昭和12年）によれば、博文館では、明治45年に経営の合理化の名の下に組織再編がなされたと推察できます。その一環で５年間続いた『実業少年』、すなわち、石井研堂が育もうとした大衆の大多数の卵である「実業界の少年」のための雑誌は、出版社の経営の論理によって、無用の用の観点からは切り離され、廃刊されたのであります。

『大橋佐平翁伝』によれば、『実業少年』は「大正元年十二月第六巻十二号にて終刊」とあり、この号の編集をもって、研堂は、雑誌編集者の時代を終えるのです。この時、研堂は満年齢47歳でした。

しかし、石井研堂は実業雑誌の編集はやめましたが、上述の『実業少年』の理念は、彼の単行本の実業読み物シリーズ『独立自営営業開始案内』（全７巻、博文館、大正２年～大正３年）に引き継がれ、働く青少年者層に受け入れられていきます。